

作 宮沢賢治 画 宇田敦子 『うろこ雲^{ぐも}』

そらいちめん^〇に青白い うろこ雲^〇が浮かび

月は その一切れ^〇に入って 鈍い虹^〇を掲げる。

町の 曲り角^〇の屋敷にある木は 脊高^〇の梨の木で

高く その柔らかな葉を 動かして ゐるのだ。

雲^〇のきれ間に せはしく青くまたたくやつは

それも何だかわからない。

今夜はほんたうに どうしたかな。

八時頃から どこでも みんな戸を閉めて

通りを一人も歩かない。



紙芝居『うろこ雲』第1場面

お城の下の 麥を干したらしい

空くひの列に沿って

小さな犬が 馳けて来る。

重く流れる 月光の底を

その小さな犬が 尾をふって来る。



紙芝居「うろこ雲」第2場面

夜の赤砂利、

陰影だけで 出来あがった 赤砂利の層。

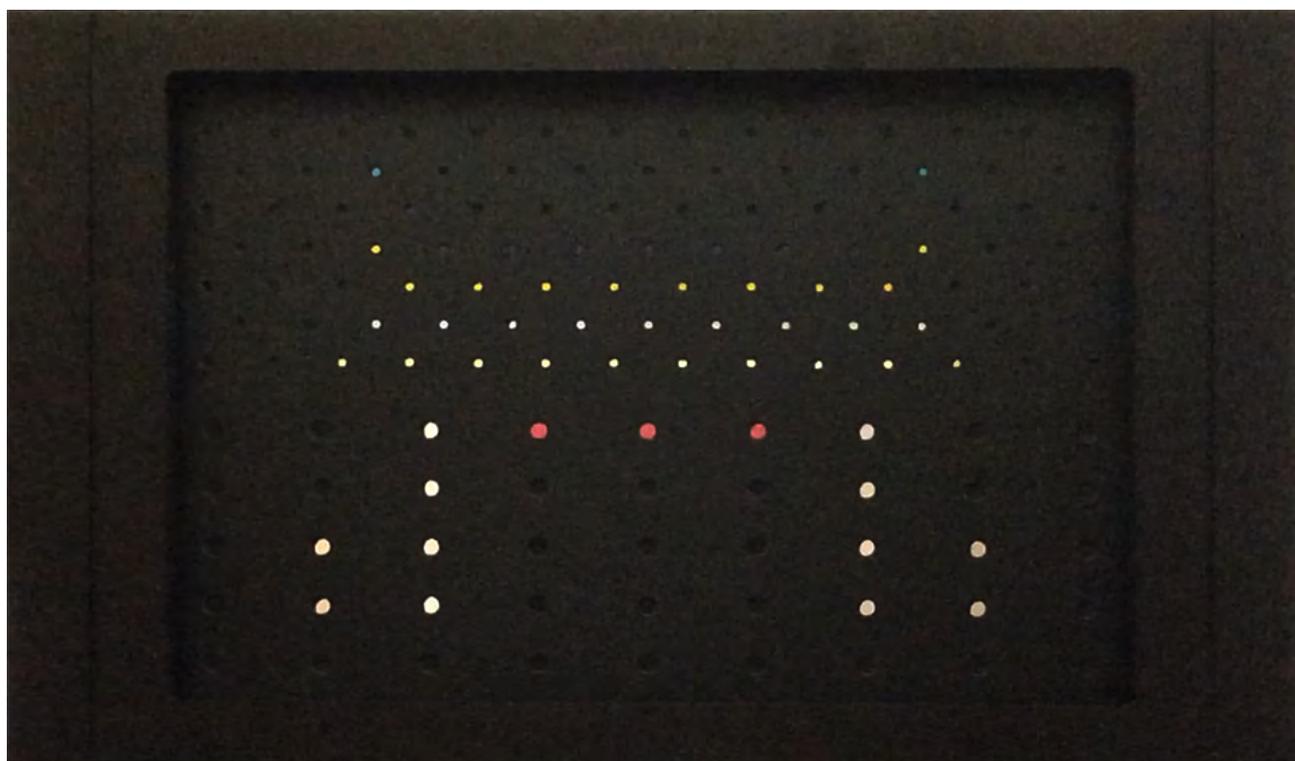
櫻の梢は 立派な寄木を 遠い南の空に

組み上げ。私は たばこよりも寂しく煙る地平線に

かすかな涙をながす。

町は まことに諒闇の龍宮城。また東京の王子の夜で

あります。



紙芝居「うろこ雲」第3場面

北上岸の製板所の立て並べられた板の前を

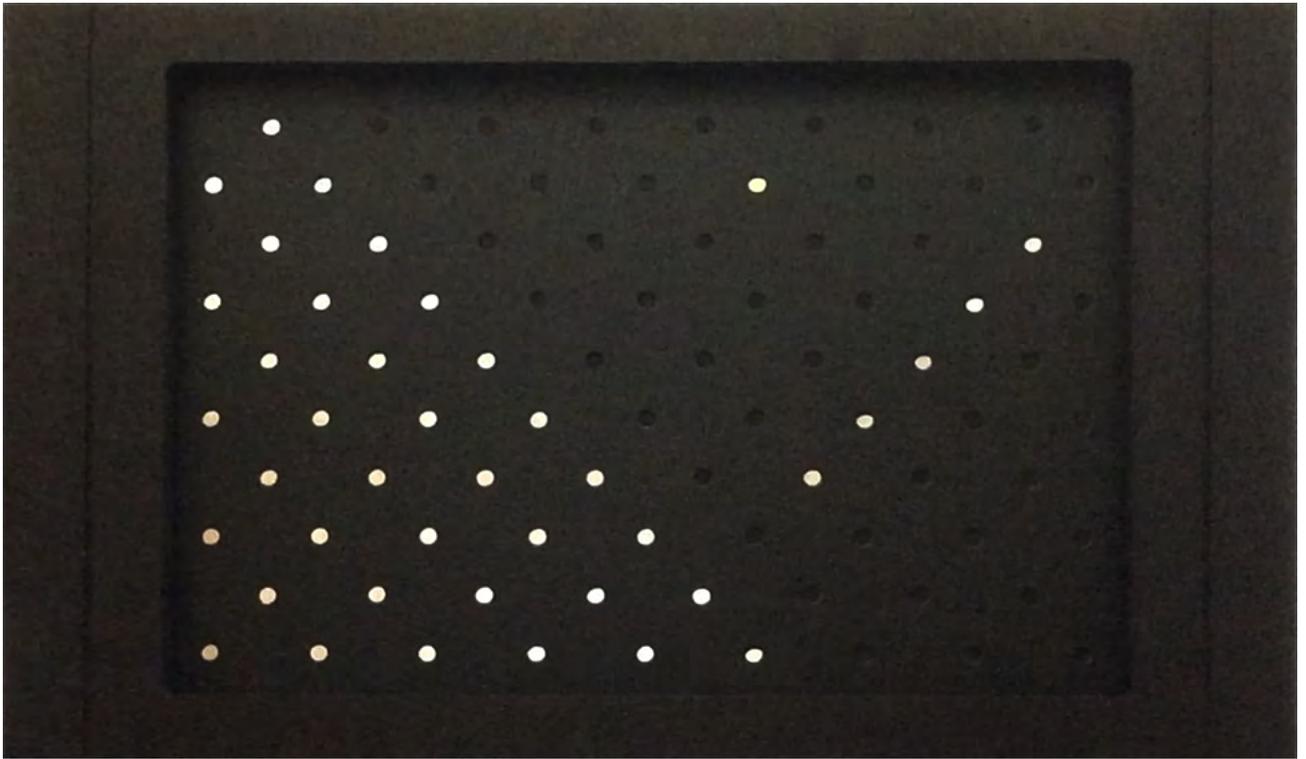
小さな男の子がふいと歩く。

それから鐵橋の石で疊んだ橋臺が

白くほのびかりしてならば私の心は

どこかずっと遠くの方を

慕ってゐる。



紙芝居「うろこ雲」第4場面

もう爪草の花が咲いた。

さうだ。一面の爪草の花、

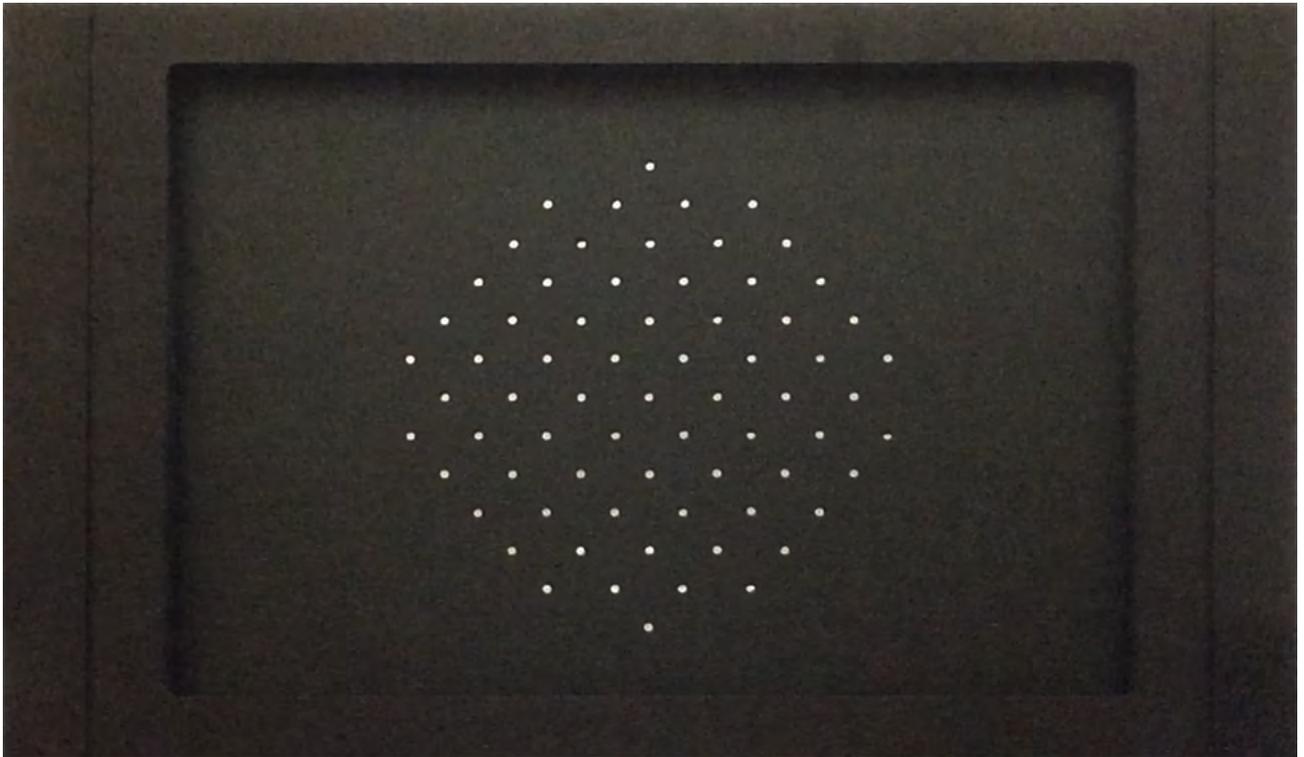
青白いとしびを点じ 微かな悦びをくゆらし

それから月光を吸ふ つめくさの原。

小さな甲蟲かぶとむしが まっすぐに飛んで来て

私の額に突き當りヒヨロヒヨロ危く 墮ちようとして

途方もない方へ 飛び戻る。



紙芝居「うろこ雲」第5場面

原のむかふに小さな男が立ってゐる。

銀の小人が立ってゐる。よこめでこつちを

見ながら立ってゐる。にやにやわらつてゐる。

にやにや笑つてうたつてゐる。銀の小人。

「なんばん鐵のかぶとむし

月のあかりも つめくさの

ともすあかりも 眼に入らず

草のにほひをとび截つて

ひとのひたひに突きあたり

あわててよろよろ

落ちるをやつとふみとまり

いそんでかぢを立てなほし

月のあかりも つめくさの

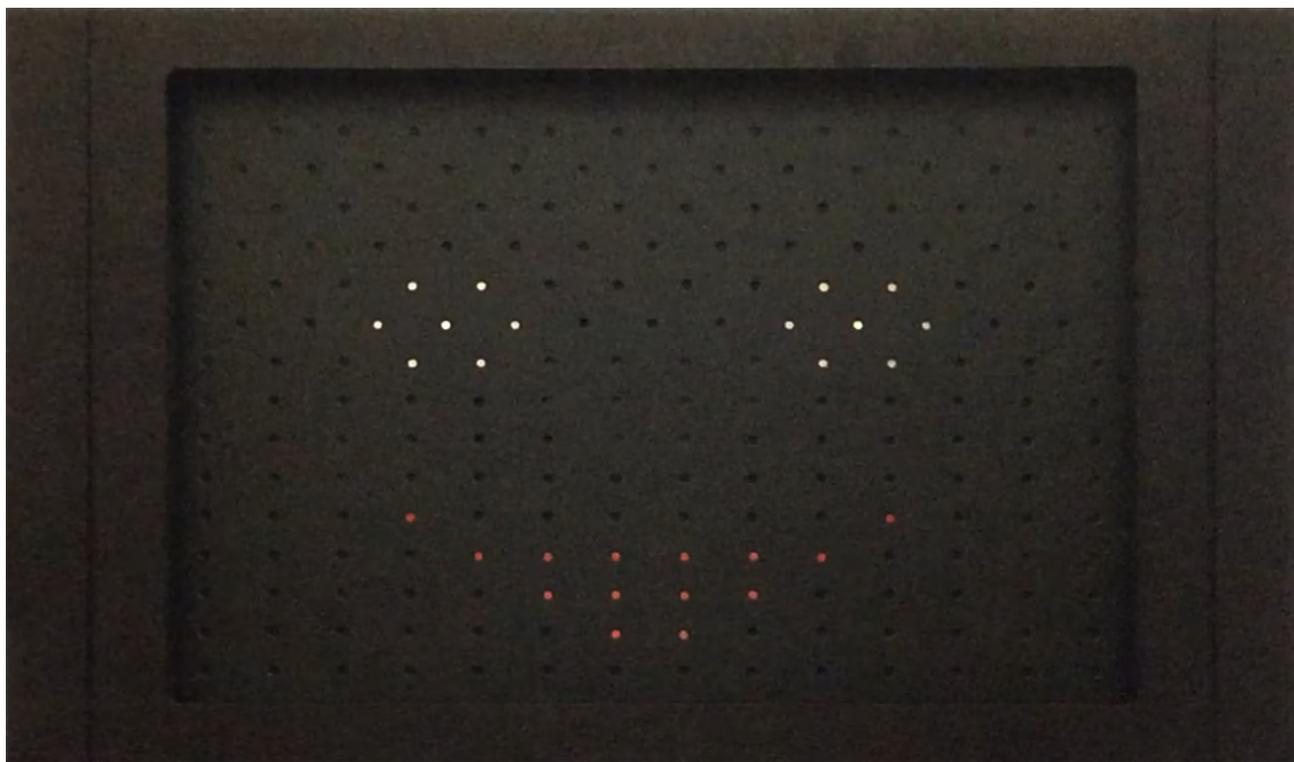
ともすあかりも 眼に入らず

途方もない方に 飛んで行く。」

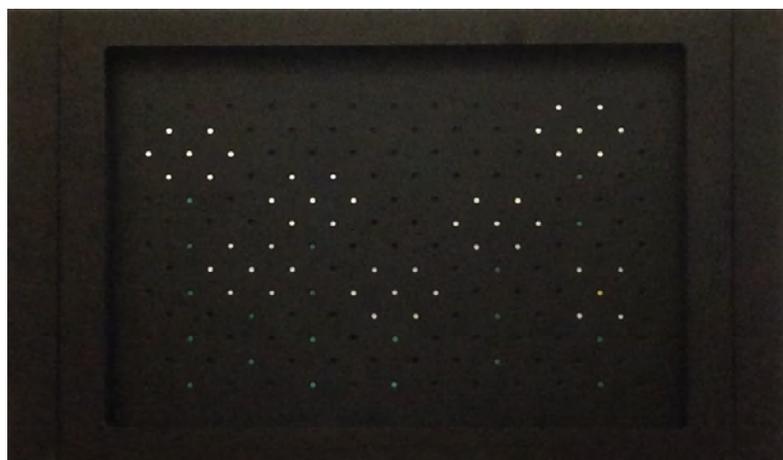
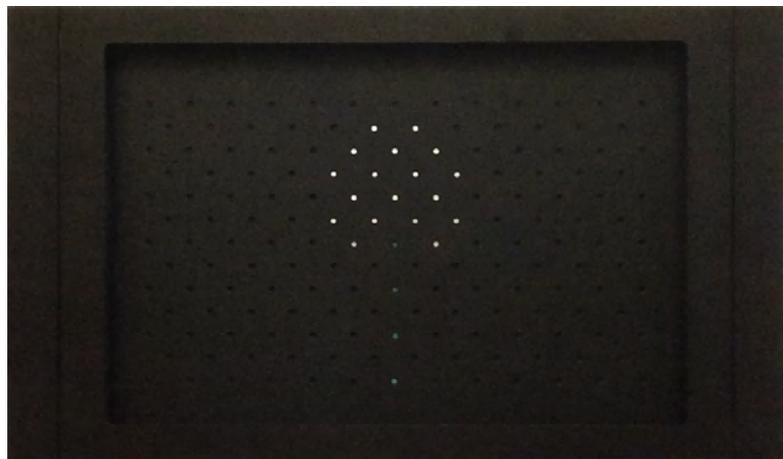
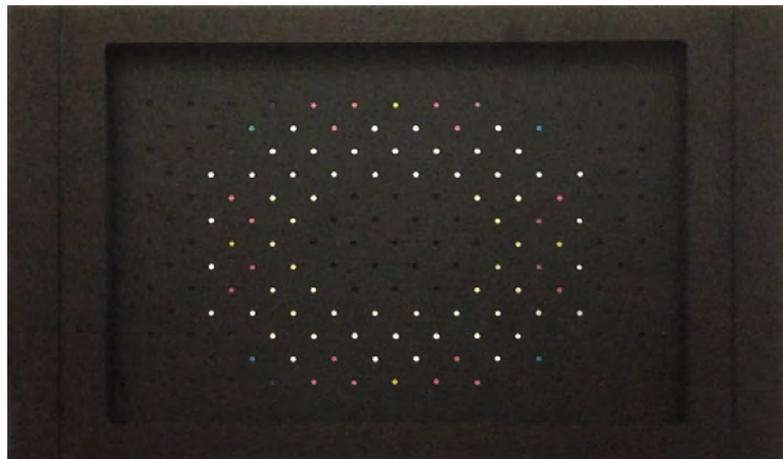
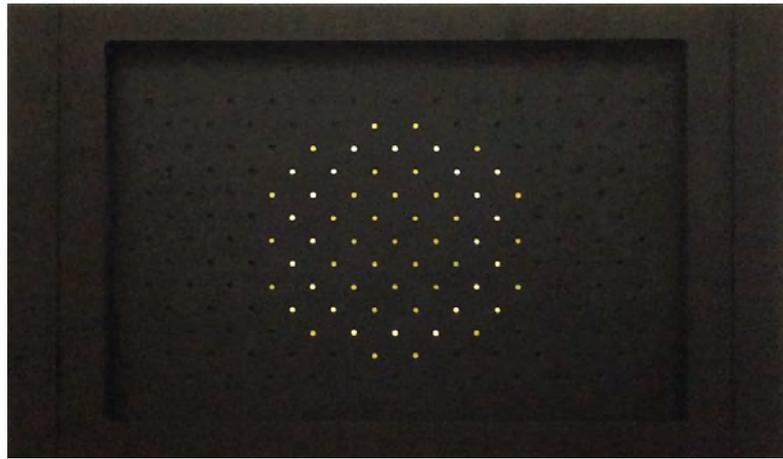
原のむかふに 銀の小人が消えて行く。

よこめでこつちを 見ながら腕を組んだまま

消えて行く。



紙芝居「うろこ雲」第6場面



紙芝居「うろこ雲」幕間

アカシヤの梢に 綿雲が一杯にかかる。

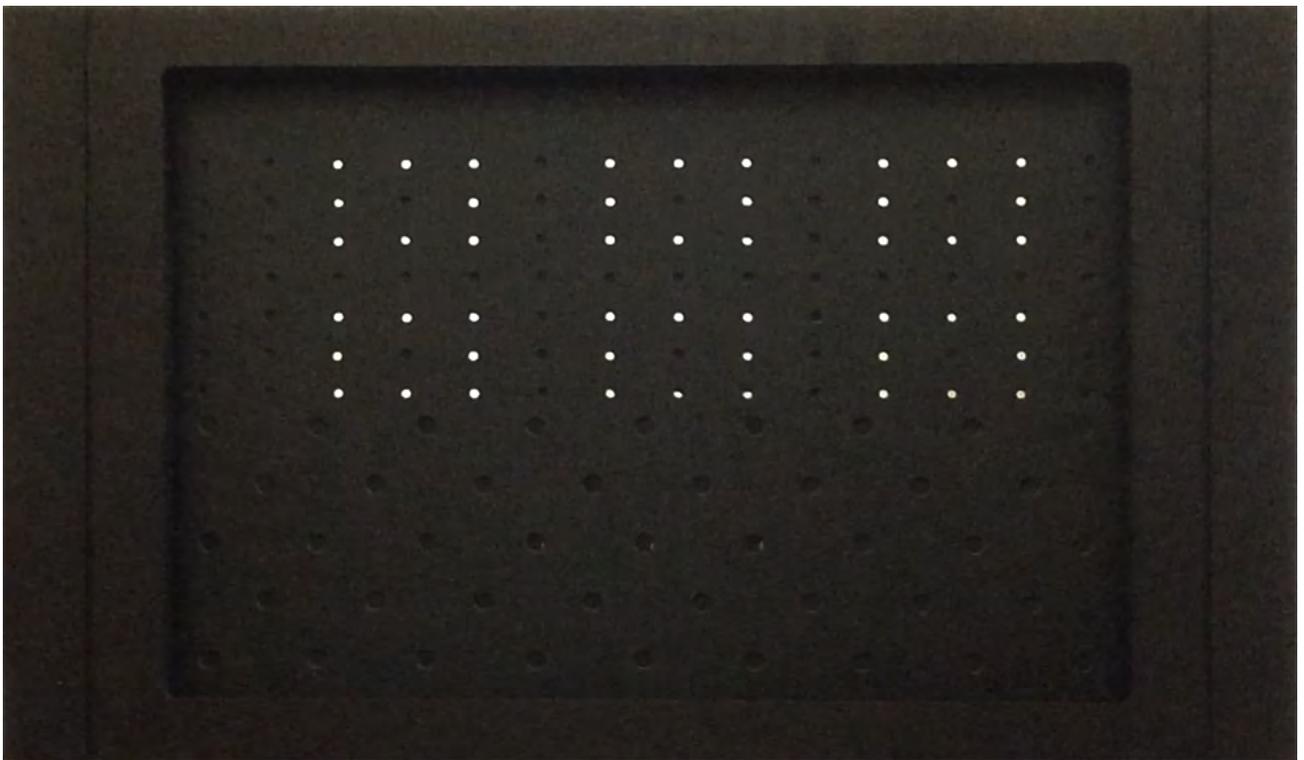
そのはらわたの 鈍い 月光の虹、

それから小學校の 窓ガラスがさびしく光り、

ひるま 算術に立たされた 子供の小さな執念が、

可愛い 黒い 幽霊になって

じっと窓から外を 眺めてゐる。



紙芝居「うろこ雲」第7場面

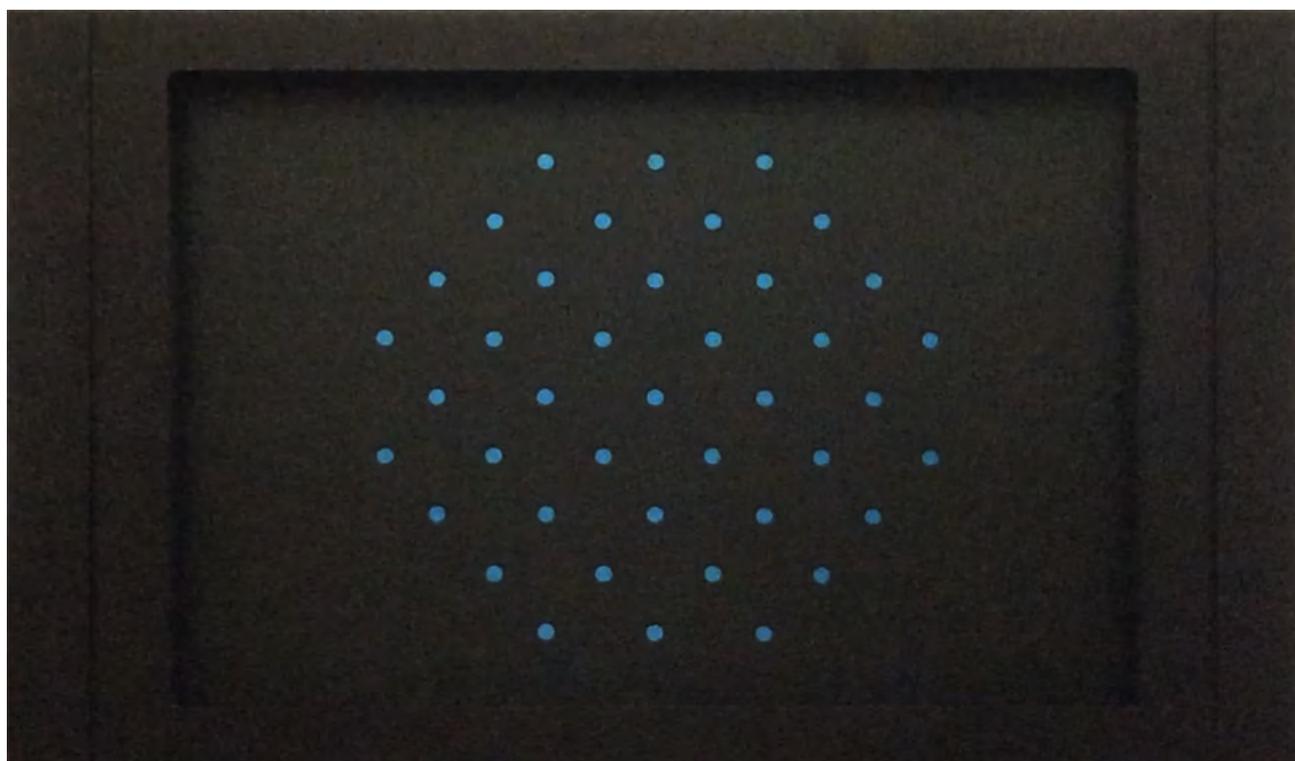
空がはれて、

そのみがかれた天河石の板の上を

貴族風の月と 紅い火星とが。

少しの軋りの聲もなく 滑って行く。

めぐって行く。



紙芝居「うろこ雲」第8場面